

二〇二六年度 入学試験問題

国語

第一回

【注意】

- ・試験時間は五〇分です。（八時四五分～九時三五分）
- ・問題は一ページから八ページまでです。
- ・解答はすべて解答用紙に記入してください。
- ・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・記号・句読点がある場合は字数に含みます。
- ・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

嘘をつかないような生き方をしている人のことを「正直だ」とか「セー
ジツだ」と言うことがあります。ではまず、正直であるとはどういうこと
でしょうか。

正直であるとは絶対に嘘をつかないことだ、という答えについて考えて
みましょう。絶対に嘘をつかないということは、どんな状況にあっても、
誰に何を聞かれても、必ず、自分がそう信じていることをそのまま口にし
るといふことでしよう。ということは、本当のことを言えば周りにからか
われたり、**A** 人命が危うくなったりするような場合でも、やはりその
まま自分が信じている通りのことを言うことになります。

自分や他人を守るために必要な場合でも、思ったことをそのまま無防備
に口にするのが、尊敬の念を込めて正直と呼ばれる人の生き方でしょう
か。どうもそのようには思えないのではないのでしょうか。全く嘘をつくこ
ともなく、このような状況なら嘘をついてもよいんじゃないか、という心
のブレもないとなると、「馬鹿正直」という言葉があるように、たしかに正
直なのかもしれないけれど、思慮に欠けるように感じられるようです。

自分や他人を傷つけても嘘をつかずに思ったままのことを言う人は、多
くの傷を負い、多くの傷を与えるでしょう。そのような痛ましい状況に対
して、「馬鹿」という言い方で済みますことが適切には思えません。では、嘘
をつかないあり方が正直であり、正直であることは、**(1)** ガラス張りの状態にな
ることではないのであれば、それはどういう生き方なのでしょう。

私たちは時として「あの人は正直な人だ」と、その人の「リップサを認め
て言うことがあります。それはどういう人のことでしょうか。

ドイツの教育哲学者であるオットー・ボルノー（一九〇三〜一九九一）は、
「率直」と「正直」を区別し、「率直」が「まだ特別な内面性を形成し遂
げる以前の状態にある」のに対して、「正直でありうるのはつねに、自分自
身に対してとらわれず自由な態度をとるか、それとも、**(2)** 自分自身を見捨てる
かという二つの可能性を自らのうちにもっているような存在だけである」
と述べています。

まず、「率直」であるというのは、ごまかしや嘘がなく、自分が信じてい
ることをそのまま言い、自分が信じていることと言っていることが一致
していることです。「絶対に嘘をつかない人」として先に見たようなあり方

30

25

20

15

10

5

は、この意味で「率直」だとは言えます。ボルノーによれば、このような
率直さは「まだ特別な内面性を形成し遂げる以前の状態にある」のであり、
つまりは、まだ嘘をつくことのできない子どもに見られる状態です。他人
に対する不信を知らず、内面を隠すことを知らない状態であり、事実とし
て嘘をついていないとしても、「嘘はつかないぞ」という意志を自らで働か
せたわけではありません。

「嘘はつかないぞ」という自発的な意志を働かせるためには、嘘をつく能
力を身につけている必要があります。内面を隠したり、他人を騙す意図を
もったりすることができる限りで、「嘘はつかないぞ」という決断もできる
のです。つまり、嘘をつかないという自発的な意志を働かせるためには、
自分の都合が悪くなれば嘘をつく誘惑にかられてしまったり、本当のこと
を言ったら周りにからかわれると分かれば嘘をついてその場をしのぐ技術
をもっていたりしなければなりません。自分が信じていることを隠してお
くことができなくてはならないのであり、**B**、ボルノーの言うように
「特別な内面性を形成し遂げている」必要があります。単に「率直」なので
はなく「正直」であるためには、社会がどういふところかある程度認識
しており、ある状況に陥れば嘘へと誘惑されるような心の側面をもってい
なければならぬわけです。

実際、「あの人は正直だ」とシウサンを込めて言われる人は、全く無
垢な人ではなく、普通の人であればつい嘘をついてしまうような場面でも、
ぐっと思いとどまってそうしない、そういう精神的な力をもっている人
でしょう。嘘をつけば利益を得られそうな場面、嘘をつけば都合な状況を
取り繕うことができるような場面、あるいは、嘘をつけば表面的には人間関
係を維持できそうな場面で、やっぱり、嘘をつくのは止めようと思いとど
まり、自分が信じていることを正直に言ったり、相手とオープンに話し合
うために努力したりする人でしょう。

ボルノーの言葉に戻りましょう。正直な人は、「自分自身に対してとらわ
れず自由な態度をとるか」、「自分自身を見捨てるのか」という二つの可能
性の間で葛藤する存在です。このような心の葛藤を経験できるといふこと
は、正直に本当のことを言うか、嘘をついてその場をしのぐか、というジ
レンマに立てることだと言い換えてもよいでしょう。

しかし、なぜ、嘘をついてその場をしのぐことは「自分自身を見捨てる
こと」であり、本当のことを言うことは「自分自身に対してとらわれず自

60

55

50

45

40

35

由な態度」を取ることもなか。本書のこれまでの内容から考えてみましょう。

★第二章で害説の検討をした時に、嘘をつくことは他人だけでなく自分自身も苦しめるという点を確認しました。嘘をつく、「嘘をついた」と相手に言うことができず、また、一度嘘をつくとその嘘と辻褃の合うように嘘を重ねるしかなくなります。言いかえれば、自分自身が相手にやったことや思ったことについて相手と自由に話すことができなくなり、どれほど後悔しても嘘をつく前には戻れないという苦しみがあります。つまり、成り行きに振り回され、自由を失い、自分が望むように振る舞えなくなってしまうのです。ここで、自分の気持ちを押し殺し、苦しみのなかに自分を閉じ込め、偽りのない人間関係を取り戻す希望も失ってしまうとすれば、ポルノーが言う「自分自身を見捨てて」ことになるでしょう。

C、嘘のせいで自分自身を見捨ててそうになっても、私たちには「自

分自身に対してとらわれず自由な態度」をもつ可能性も残されているとポルノーは述べています。友達と遊んでいたらつい楽しくなって恋人との約束に遅れてしまった時、自分の不都合を取り繕うために何気なくついた嘘が大きな嘘になってしまい、恋人に悪いと思ってもあれは嘘だったと言えない時、自分の思っていることや自分が今日したことなどをオープンに話せる仲がどれだけ貴重であるかが身にしみるでしょう。その気持ちに忠実になるなら、どんなに謝ることになっても、あるいは呆れられることになっても、本当のことを話そうという勇氣をもてるかもしれません。D 話してみたら、恋人は呆れることも、謝ることを求めることもなく、「気にしないでいいよ」と言ってくれるかもしれません。その時には、相手はどうせ怒るだろうと決めつけていた自分の小ささに恥ずかしくなるかもしれません。自分自身に対して自由な態度をもつということは、さまざまな思い込みや恐れにとらわれずに、自分に素直に、自分らしくあるうとすることだと言えるでしょう。

嘘について自分を失ってしまう可能性と自分に忠実に自分らしくある可能性の間で、葛藤できる心(内面性)をもっていることが、正直であることには必要です。正直であるために必要なのは、裏表がないことではなく、嘘をつきたくなる時にぐっと思いとどまる意志であり、嘘をついてしまった時にも本当のことを話そうとする意志を失わないことです。以上のことから興味深いことに気づかれます。正直であることは、一方で他人に対

して嘘のない生き方であり、つまり、他人を傷つけたり他人の「リガイ」関心を決めつけたりすることへの抵抗があり、他人とオープンに対話することを求める生き方だと言えます。しかし同時に、正直であるとは、自分自身を大切にすることであり、自分らしくあることをセツボウすることなのです。

(池田喬「嘘をつく」とはどういうことか 哲学から考える」)

★第二章で害説の検討をした時に

……問題文の引用の始まる前の部分で、筆者は嘘をつくことは他人にも自分にも害をおよぼすと述べている。

問一 — (1)「ガラス張りの状態」とありますが、これはどのような生き方ですか。三行以内で説明しなさい。

問二 — (2)「まだ特別な内面性を形成し遂げる以前の状態」とありますが、これを成し遂げた後とはどのような状態ですか。三行以内で説明しなさい。

問三 — (3)「自分自身を見捨てて」とありますが、これはどのようなことですか。三行以内で説明しなさい。

問四 — (4)「『正直』であるため」に筆者は何かが必要であると述べていますか。四行以内で説明しなさい。

問五

——(5)「私たちには『自分自身に対してとらわれず自由な態度』をもつ可能性も残されている」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 嘘をついた相手と互いに信じあうことができれば、いかなる場合でも自分のおかした失敗を許してもらえはるはずであると期待できるといふこと。

イ 嘘をついた相手に対して人間関係をあきらめたり、冷たい仕打ちをされたりすることを心配せず、自分の信念を通せば関係の修復が見込めること。

ウ 自分のしたことは正しいといふ思い込みを捨てることができれば、他人の批判を気にせずに自分に素直に過すことが可能になるといふこと。

エ 嘘をついた相手に対する思い込みや恐れにとらわれることなく、自分が自分らしくあることを信じて行動すれば自由を失うことはないといふこと。

問六

筆者の述べる「正直」の例にあてはまるものはどれですか。最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 料理が苦手なお母さんが栄養面を考えて一生懸命に作ってくれた料理に対して、子どもが「この料理はまずい」と言う。

イ 仕事で自分が失敗した際に同僚の手前その場のぎのぎのことを言ったが、上司に隠し事はしたくなかつたので、報告する。

ウ スポーツの試合に勝ったとき、自分の努力が実った嬉しさを隠すことなく、負けた相手の目の前でチームメイトと大喜びする。

エ 悪かつたテストの点数を保護者に伝えると心配をかけてしまうので報告せず、その代わりに次のテストに向けて一生懸命努力する。

問七

A ー D に入れる語としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし同じ記号は二度以上使えません。)

ア そして イ しかし ウ あるいは エ つまり

問八

——ア～オのカタカナを漢字に直しなさい。

問九

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 絶対に嘘をつかないといふことは、状況をすべて把握しきれないような場合でも、自分が信じていることをゆるがせることなく本心から発言することである。

イ 状況や相手に左右されることなく自分の信じていることを必ず言うことは、他人から「あの人は正直な人だ」と尊敬されほめたたえられるようなことである。

ウ 自分自身がどんな時もだれにも嘘をつかないと心に決めていたとしても、社会のなかでは嘘をつくことは認められているので時と場合によっては嘘をついてもいい。

エ 嘘をついた相手との仲を思つて後から本当の話をしようと考え直した場合、相手がどのような反応をするかわからなくても本当の話をするのが自分を大切にすることだ。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

これまでの主なあらすじ

作家の森木ヤマネは、コロナ禍のなかで知り合いに頼まれてオンライン講座のゲスト講師を務める。オンライン講座には年齢も職業もさまざまな人々が参加しており、オンライン講座の期間が終わった後も交流が続いていた。コロナ禍が収束し始め外出できるようになり、ヤマネと講座のスタッフや受講生たちで「遠足」を行うことになり、みんなで玉川上水沿いを歩きながら話している。

水路の向こう側の遊歩道にも、歩いている人たちがいて、走っていく人がいた。木々の向こう側にちらちらと姿は見えるが、話し声はこちらにまでは聞こえなかった。

七坂さんが★ロケ地探しを手伝ったという丘ノ上さんの映画はもう撮影したんですか、と湯元が聞いた。

ええ、ついこの間。私も二度ほど見学させていただきました。いいなあ、俳優さんは誰が出てるんですか。それはまだオフレコです。オフレコ、はずっと非公開のことじゃないですか？ そうか、まだ未発表です。オフレコ、つて、オフ・ザ・レコードの略だよ。考えてみればそうか。記録に残ってない話、たくさんあるんだろうなあ。オフレコだけあとで出てきて記録に残る話もありますね。この世で起きたことのほとんどは、記録に残ってないんだなあ。

(1) 五人の話した声は、秋のほどよい温度の空気に拡散していった。

今までに何人の人がこの道をこんなふうに話しながら歩いていったらう、とヤマネは考えていた。話した声はそのときのその場で消えて、大半は録音も記録もされていなくて、誰かの記憶には残っているかもしれないが、それもまたそれほど長い時間残るわけではない。

川沿いの木々がそのたくさんの声を聞いていて、木の中にはそれが残っていたらいいのに、とヤマネの頭の中の想像はとりとめもなく転がっている。実は木には記憶があつて、いつかそれを知ることができる技術が開発されるとか。いや、それは人間中心の見方だな、木のほうが私たちに伝えるようになるかもしれない。人の会話だけじゃなくて、他の木々や鳥や動物のこともわかるかもしれない。今は私たちがわからないと思っ

けなのかもしれないし。

ヤマネが考えているあいだに、七坂がロケ地探しで訪れた家のことを話していた。映画の内容については来月ぐらいいは発表になるのでお楽しみになんですけどさつき話した家は結局は撮影には使わなかったんです。

黒い瓦屋根が印象に残るお家で、豪邸や特別に大きなお家ではないんですけど、敷地がゆったりして落ち着いて暮らせそうだなって、つい自分が住むのを想像してしまいました。築年は不明で、古いのは古いんですがどれくらい古いのか私が見ても正確にはわからなくて。

お家にそのまま残されている着物や食器はそんなに昔のものとは思えないすごく鮮やかでモダンなデザインで。着物って洋服よりもめっちゃ派手な色で柄ですよ、よく考えると。でもほんと、大胆な幾何学模様みたいだったり風景がデフォルメされて着物一枚で周りの雰囲気が変わるくらいインパクトがあったり、いいものを見せてもらったなあってして。

持ち主だった方は、地元の女学校時代に東京の小説同人誌に寄稿したりもしてたんだけど家を離れることは反対されて同じ町内の人と結婚して、それで住んだお家だそうです。

ヤマネの頭の中は、今度は戦前に単身でアメリカに渡った山沢栄子のことに移っていった。モダンな着物の持ち主だった人は、山沢栄子と近い世代だろうか。七坂が語る言葉から想像した着物の柄と、山沢栄子の抽象絵画のような写真が、重なり合った。着物と写真の年代は違っても、その人と山沢栄子が好きだったものがつながっていたりするかもしれない。

七坂は話し続けた。

案内してくれた人はその方の従兄弟のお孫さんで、昔この家にときとき連れてきてもらったけどいつもおしゃれで楽しい人だったそう。近所の子供たちもよく遊びに来ていて、何度か会ったことのある向かいの家の娘さんがその後北陸へ行って陶芸の職人になり、子供のころにあの家で美しい着物や食器を見せてもらったことが陶芸の道に進んだきっかけの一つだったと振り返ってみると思うと話していた。実際に手に取って見られたというのもあるけど、そのおばさんがそれぞれについてどんなところが好きで、どんなふうに素敵なのか、と話してくれたことが心に刻まれている。

そういうの、いいなと思って。七坂は遊歩道の木々やその向こうの家に

視線を移しながら、自分自身で確かめるように言葉をつないだ。直接教わるとか弟子とかじゃなくても、そのときは目的みたいにはつきりとわかっていなくても、いつかどこかで、誰かにとってだいじなものになったり支えになってたりすること。

ですわね、と誰かがしみじみ言った。

見上げた空の途方もなく遠いところに、とても小さく飛行機が見えた。どこに向かう飛行機だろうか、とヤマネは見失いそうな光を目で追った。あの高さなら、私たちが歩いているこの土地はどんなふうに見えるか、今までに乗った飛行機の窓から見下ろした地形がよくわかる風景を思い浮かべた。多摩の山々から川が流れ、水の流れに沿って開けた平野が海へと続いている。

二十代と三十代の四人は、自分の今の仕事や好きなもののきつかけになったのはあのときのあれだったかも、とそれぞれが思い出したことを話していた。

ヤマネは、七坂が読んだ短編のことを考えた。思い出せない短編の中で五分だけ散歩する間に、登場人物たちは何の話をしていたんだろう。それは小説を書いているときに考えたことだったのか、それとも今みたいに誰かと歩きながら話したことが元になっていたのか、だとしたら誰と歩いたのか。

ヤマネは人と歩くことも、歩きながら話すこともよくあった。今までにどのくらいかわからないが何人もの人と歩いて、今も覚えていることも今は忘れていることも話した。話している間に考えて、言おうと思って言えなかったこともたくさんあった。

「そういうことをなにかの形で手伝うようなことがしたいんですけどね。誰かが作ってきたりだいじにしてくれたものを、別の誰かに手渡すような。誰かが待っているものを、どこかで見つけてくるような。自分に何ができるのかは模索中ですね、まずは来年度の仕事をどうするかで感じですし、現実の生活としては」

七坂が言い、三人も似たようなところがあると頷いた。

ヤマネも、続いた。

「私もですわねえ」

「森木さんが？」

と辻が意外そうに聞き返した。

「長いこと書けないままの小説があつて」

「長いことつて、いつからですか」

「三年、あ、四年近いかな。去年とおとしあたりつて記憶がごっちゃになっているから、実はかなり時間が経ってびっくりしますね」

「そうですね、講座はもう二年前から」

鳥がひととき高く鳴いて飛んでいった。

「変電所を見に行つたのは、その小説のためですか？」

湯元が尋ねた。

「自分の中ではつながってはいるんですが、それを小説の中でどう書くかがまだつかめない感じですね。山がそこにあるんだけど、登り方がわからないというか、道が見つかからないというか」

「登り方がわからない、道が見つかからない。人生そのものが日々その状態です」

七坂が言うと、他の三人もわかると言つてそれぞれが今の仕事での悩んだり迷つていたりすることを話し、興味があることが自分の仕事にはつながらなそう、仕事じゃなくても続けたり人に知ってもらうにはどうしたらいいだろうと話した。

ヤマネは、ときどき自分に振られた質問に答えながら、彼らのような先が見通せない不安や現状への焦りからは、年を重ねた自分はそれなりに離れていると思つた。これからどうするかどれを選べばいいのかとあまりに茫洋として揺らいでいた彼らくらいの時期を懐かしんでしまう自分に驚きもした。

今の自分に不安も焦りももちろんあり、生活も決して安定しているわけではないが、圧縮されて漂うような数年のあいだに切実に思うようになったのは、書きたいと考え続けてきたこと、やりたいと思つてきたことを、あとどれくらいできるかということだった。迷っている時間や、そのうちにいつかと思つている時間は、彼らにとっては重く長いものかもしれないけれど、自分にとってはすでに重くも長くもなく、もつとはつきりと目の前にある。

「山に登る道がわからないとき、森木さんはどうするんですか？」

「毎回、違いますわねえ。前の山はこうやって登つたからって同じことをしてもうまくいかなないので、また一からやってみる感じです」

「えー。人生の今後大変そうだなあ」

思わず言った畑田に、ヤマネは笑いつつ、もつと前向きにアドバイスのことを言ったほうがよかったかなと思ったりもした。

そして、⁽⁴⁾講座に参加していたときに読んだ本に書かれていた、「⁽⁵⁾お雇い外国人」の調査をしたグリフィスの手紙の一文が、頭の中に響いた。

「夜が来る。だから生き残っている者は、早く記録を作っておくべきです。」遊歩道に沿って作られた小さな公園が見えた。真ん中に不思議な形をした薄桃色の遊具があり、かたつむりの中身みたい、⁽⁶⁾三半規管っぽい、と彼らは適当な感想を言った。

だんだんと夕暮れの気配が広がっていた。昼間の陽気から秋のさらりと冷えた空気が満ちてきて、木々に囲まれた道は心地よかった。

今日は夕焼けにはならなそうだった。夕焼けになる日とまらない日はなにが違うのか、ヤマネはわからないままだった。だから毎日、今日はどんな空の色になるのか気になった。

★〈校庭で振り返ったときに見たあの美しい夕日を覚えているかしら〉
あの手紙が宛名の人に届いたのだったらいいなと、今はそう願うばかりだった。

「今日は皆さんと歩いてよかったです。いろんな人が作ってきたこの道を」七坂が言った。

「ぼくは一人だとなかなかこんなに歩くことはないですね」畑田が言った。

「話しながらだとけっこう歩けちゃいますよね」辻が言った。

「ぼくは一人でも長距離歩きますけど、人と歩くのもいいですね」

湯元が言った。それから、湯元が以前テレビのドキュメンタリー番組で見た二千キロメートルを超える道の踏破に挑戦する人たちのことを話し、講座で入江が作品に書いていた巡礼の道の話になり、入江がいる島の道を歩きたいという話になり、瀬戸内海でも長距離を歩くイベントがある、走るのは苦手だけど歩くのだったらやってみたくも、私が行っていた高校は真冬に登山の行事があつて、と定まらないままの会話が続いて、彼らは水の流れと並んで歩いた。

四月の終わり、速達で届いた七坂からの封筒を開けると、⁽⁵⁾入り組んだ海岸線の見晴らしのいい場所から海を見下ろした写真が入っていた。折れた

155

150

145

140

135

130

125

たまれた大きな紙は地図で、小さい紙二枚は手紙だった。

入江が島のいくつかの宿や店と協力して、ゴールデンウィークに映画のイベントを企画した。丘ノ上の映画が今日上映される予定で、講座の受講者の数人も島を訪れる。七坂は企画者の一人として先週から滞在中だ。ヤマネは別の仕事との調整がつかず、現地には行けなかった。

古地図を模して描かれた地図は、その映画イベントの案内図として入江が作ったもので、会場となる宿や店とともに入江や店主たちの好きな場所が描き込まれていた。手紙には、入江が何度か映像に撮っていた浜辺に行ったら満ち潮で堤防の際まで海だったと書いてあった。

ヤマネは、写真と地図をテーブルの上に並べてみた。海の青が写真と地図でちょうど同じ色だと思った。

スーパードで買ってきたものを冷蔵庫に片づけて、お茶を飲んだ。それから、机に向かった。

白い画面に、書きかけている文章が並んでいた。文末で、今こですよ、と知らせる印が C と点滅している。

画面の向こうに、空が見える。ガラス越しの空は、静かで晴れていた。夕暮れまでには、まだだいぶ時間がある。

キーボードを打つ。規則的な音が響く。数行書いて、少し戻って消し、また数行書いた。「今こですよ」の印が、その分だけ移動する。静かな部屋に D と断続的な音だけが鳴り、白い画面に言葉が増えて、ヤマネは一息ついた。

日が暮れる前に、入江の宿で丘ノ上の映画が上映され、そのあとの対談ゲストとしてヤマネは部屋からオンラインで参加することになっている。なにを話そうか、と先週見た丘ノ上の映画を思い出して、いくつか質問をメモに書き加えた。

そうか、ここよりも西に位置する島の夕暮れは少しあとの時間になるのか、とヤマネは思い立ち、外の景色を映してもらえるように七坂にメッセージを送信した。

それから、ヤマネは白い画面に戻った。夕暮れの時間まで、書き続けられるところまで書く。

⁽⁶⁾窓の外に広がる明るい水色の空は、ほんの少しずつ色を変えていった。

(柴崎友香『遠くまで歩く』)

185

180

175

170

165

160

★ロケ地……映画などで撮影所の外へ出て撮影する際に、撮影に使用する場所。

★幾何学模様……多角形、円などの図形をモチーフとして規則正しく用いた模様。

★デフォルメ……絵画などで、対象を意識的に変形して表現すること。

★同人誌……主義・趣味などを同じくする人たちが共同で編集発行する雑誌。

★山沢栄子……日本の写真家（一八九九～一九九五年）。ヤマネは以前、山沢栄子の展覧会に行ったことがある。

★お雇い外国人……明治時代の初めに欧米の学芸・技術・制度を移入するために指導者として政府や民間が雇った外国人のこと。
ウィリアム・グリフィス（一八四三～一九二八年）は自身も「お雇い外国人」で、「お雇い外国人」についての調査を行って記録が多く残っている。

★三半規管……耳の中にあつて重力の方向に対する身体的位置を知る感覚をつかさどる器官。

★〈校庭で振り返ったときに見たあの美しい夕日を覚えているかしら〉

……何年も前にヤマネが昔の人の手紙などを売る古書店で手にした手紙に書かれていた言葉で、女学生が長い休みの間に級友に送ったものだと言まねは推測している。

問一

——(1)「五人の話した声は、秋のほどよい温度の空気に拡散していった。」とありますが、「話した声」が「空気に拡散していった」とはどういうことですか。二行以内で説明しなさい。

問二

——(2)「七坂がロケ地探しで訪れた家のことを話していた。」とありますが、このロケ地探しを通して七坂はどのようなことを最も強く感じましたか。四行以内で説明しなさい。

問三

——(3)「山がそこにあるんだけど、登り方がわからないというか、道が見つからないというか」とありますが、ヤマネが言おうとしていることはどのようなことですか。説明として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア この先どうすればいいのか見通しが立たず、何もできないまま時間がたっているということ。

イ 自分を取り組むべきことは決まっているが、どう実現すればいいのかが方法がわからないということ。

ウ いつかやるべきことはわかっているのに、時間の感覚を失ってしまつて実現が難しいということ。

エ 目の前に立ちまはだかる難題があつて、それを克服するための方法が見つからないということ。

問四

——(4)「講座に参加していたときに読んだ本に書かれていた、『お雇い外国人』の調査をしたグリフィスの手紙の一文が、頭の中に響いた。」とありますが、このときヤマネはどのようなことを思っていますか。三行以内で説明しなさい。

問五

——(5)「入り組んだ海岸線の見晴らしのいい場所から海を見下ろした写真が入っていた。」とありますが、「海」に係る次のⅠ～Ⅳの慣用句やことわざのⅠ～Ⅳに入る言葉を書きなさい。（ ）
内はそれぞれの意味を表します。答えはひらがなでも構いません。

Ⅰ 井の中のⅠ 大海を知らず

（世の中のことを知らず、考えのせまい人のたとえ）

Ⅱ 海のものともⅡ のものともつかない

（ものごとの正体がかみかず、結果がどうなるか見当がつかない）

Ⅲ えびでⅢ をつる（小さな元手で大きな利益を得る）

Ⅳ 魚心あればⅣ

（相手が好意を示せば、こちらも好意をもって応える気になる）

問六

——(6)「窓の外に広がる明るい水色の空は、ほんの少しずつ色を変えていった。」とありますが、この風景はどのようなことを意味していますか。説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 晴れた昼の空の様子であることから、ヤマネだけでなく七坂や受講生たちがそれぞれ抱^{かか}えている悩^{なや}みがこれから解消されていくということ。

イ 空の色が時間が経^たって少しずつ変化していることから、ヤマネと七坂や受講生たちとの関係性がこれからも少しずつ変わっていくということ。

ウ 水色の空が何色に変化するのか語られていないことから、ヤマネがこの先どのように小説と向き合うのかはまだ不明であるということ。

エ 昼の空の色から夕暮れの空の色に変化していることから、ヤマネの小説を書き続けていられる時間の限界が刻々と迫^{まさ}まっているということ。

問七

A へ D に入れる語として最もふさわしいものを、次のア～タの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし同じ記号は二度以上使えません。)

ア	のろろ	イ	のんびり	ウ	ずらり	エ	ちかちか
オ	いらいら	カ	がんがん	キ	ぱらぱら	ク	ちゃっかり
ケ	げらげら	コ	うっとり	サ	つるり	シ	いきいき
ス	かたかた	セ	ぺこぺこ	ソ	がらん	タ	どんどん

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ヤマネは七坂が行った家の話からかつて見た写真に写る人物のことを、また夕暮れが近づいていることからかつて見た手紙の言葉のことを思い出しており、見聞きしたことから連想を広げながら歩いている。

イ 玉川上水沿いを七坂と話しながら歩くなかで、ヤマネは自分が以前書いた五分間だけ散歩する小説の内容や、その小説を書いていた時に考えていたことが読者の記憶にはつきりと残ると確信している。

ウ 玉川上水沿いを歩きながら、ヤマネと七坂と丘ノ上と湯元と辻の五人はお互^{たが}いに話しているが、彼らの話はきちんと筋道だったものではなく、それぞれが思いついたことを思いのままに話している。

エ 入江が企画した映画のイベントのために七坂が滞在している島の外の景色を映してほしいとヤマネが頼むのは、それぞれがいる場所についての記録を残したいと思ったからである。

二〇二六年度 入学試験解答用紙

第一回
洗足学園中学校

受験番号

--	--	--	--

氏 名

1000

問九

問八

問七

問六

問五

問四

問三

問

問一

[illegible]

問八

問七

問六

問五

問四

問三

問二

問一

Figure 1 illustrates a 2D grid layout. The grid is composed of several rectangular blocks. On the left, there is a vertical column of four blocks labeled A, B, C, and D, with a total height of 2 points $\times$ 4. To the right of this column is a single block labeled I, with a height of 4 points. Further right is a single block labeled II, with a height of 2 points. To the right of block II is a large rectangular area divided into four vertical columns, each with a height of 8 points. The total width of the grid is 2 points $\times$ 4 + 4 points + 2 points + 8 points = 18 points.